

日本丁場見聞コラム

## 万成石の健太が行く No.8



(有)武田石材 (岡山市)

### 高橋健太

石の時計がこれから時を刻み続けることになりました。

この岡山の地で採れた万成石を使用した時計台は、やはり岡山の駅にはびつたりだと僕は思います。

まさに「地産地消」です。今回はこの万成石製の時計台について加工工程を踏まえながら紹介したいと思います。

この時計台は本体部分と台座部分の二つの石から構成されており、その上に直径七〇cmの時計を設置した全高三mを超えるとても立派なものです。

まず、本体部分の石の両側面に



J R 岡山駅西口に設置した万成石の時計台

模様をつけていくことから始めました。その模様は、採石のため発破などを行う際の穿孔穴を利用したものです。通常その穿孔穴は一尺間隔ぐらいで掘っていきますが、今回は模様として生かす為に約二寸間隔で穴を掘っていく必要があります。

墨出しをしていざ掘り始めると想像以上に穴と穴の間隔が

狭く、途中でつながってしまう危険性があり、それが両側合わせて五十本近くあるので、かなり神経を使った作業となりました。

次に時計の電線を通すために、石の真ん中に直径四〇mmの貫通穴を開けていきます。この本体部分の石は高さが二m以上あるので、貫通穴を開けていく時に少しでも傾くと掘り終わる頃にはかなりの

先日、J R 岡山駅の西口に万成石の時計台を設置してきました。この時計台はすべて弊社で自社加工したものです。

岡山市は政令指定都市に移行し、昨今岡山駅西口周辺の大規模な開発が進んでいます。以前に比べると、綺麗に整備されたロータリーが出来たり、「さんすて」という複合施設ができたりと随分様変わりしました。その新しい西口で万成

ズレが生じます。そのため、全面と側面から石のセンターを何度も確認し、微調整を行いながらの作業となりました。

貫通穴が開いた所でいよいよ工場での加工にとりかかります。この本体部分の石の側面は穿孔穴を生かした荒肌仕上げですが、前面と後面は対照的に「磨き」で仕上げられています。前面と後面を切削して厚みを決めた後丁寧に研磨をかけていきます。鮮やかな桜色がで

きたところで完成です。

次に台座部分の石の加工にとりかかります。この台座の石は天場のみ磨き、残りの四方は割り肌仕上げです。割り肌部分は山で割った時の面がほとんどそのまま生かされるので、綺麗にまっすぐに割るため、より慎重に石の目にあわせて割っていきます。後は天場下場を切削して磨いていきます。そして台座の石にも電線を通す貫通穴を開け加工は終了です。

加工終了後、検品のため工場では組みをおこない貫通穴などの位置を確認。すべて計算通りに収まり完成しました。「磨き」で強色がでている部分と割り肌の少し白っぽい色とのコントラストが美しく、とてもいいものができたと思います。

そして去る十一月十五日に除幕式の日を迎え、この万成石の時計台が時を刻み始めたのです。今回の仕事は、多くの人々に万

成石を感じてもらえるとてもいい機会でもありました。一つは多くの人が行きかう駅という公共の場であるということ。二つ目に時計という人が思わず目をむける対象であることがその理由にあげられると思います。石のあたたかみや美しさ等本当にいろいろなことを感じてもらえたらうれしいです。

完成した時計台の写真を撮りに行った際、老夫婦の方が熱心にこの時計台を見ておられました。僕はこの光景をみてやはり石には人を引き付ける特別な魅力があると感じました。

石材という材料は最も古くから使用されてきたものであり、無限の可能性を秘めたものであると思います。この可能性をどれだけ実現していくことができるかということが僕たちの最大の課題であり、また最高の楽しみでもあります。



神経を使った作業が続きました